

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	古典ヘブライ語動詞におけるニファル語幹の受益機能について : 動詞 š' l の分析を中心として
Author(s)	三上, 宗一
Citation	ニダバ , 21 : 57 - 66
Issue Date	1992-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047230
Right	
Relation	



古典ヘブライ語動詞における ニファル語幹の受益機能について¹⁾

— 動詞 $\sqrt{\text{שׁ}}$ の分析を中心として —

三 上 宗 一

0. はじめに

古典ヘブライ語の動詞組織において、ニファル語幹は主として基本語幹（以下QAL）に対応する中受動ないしは再帰語幹として機能するとされている²⁾。これらの機能はさらに一連の下位の機能に細分化されており、本来的な再帰以外にもさらに相互‘reciprocal’や認容‘tolerative’などをはじめとする一連の機能が指摘されている³⁾。

一方、これら以外にもニファル語幹では一部の動詞に受益‘benefactive’という機能が指摘されている。これは再帰機能に下位分類されることもあるが、再帰をはじめとするそれ以外の機能との関連についてはあまり明確ではない。一般的にはギリシャ語の中間態と類似した意味、すなわち「自らのために～する」というニュアンスを帯びた意味⁴⁾を表すとされているが、これは主として文脈など翻訳上の要請に基づく解釈であり、元の再帰の意味や、他の語幹との対応関係といった観点からの考察に基づくものではない、という事情がある。

そのため今回の小論では、この受益の機能に特に焦点を当て、その代表的な事例とされている⁵⁾ $\sqrt{\text{שׁ}}$ のニファル語幹の用法について主として語幹機能の立場から再検討を加えることを目的とする。そして文脈以外の立場からもこの機能を積極的に認めることができるかについて検証するために、今回はあえて考察の対象となる文を文脈から抽出し、極力文脈的な要因を排除したうえで議論を進めたいと思う。

1. $\sqrt{\text{שׁ}}$ のニファル語幹の用法に関する従来の解釈とその問題点

古典ヘブライ語の動詞語根 $\sqrt{\text{שׁ}}$ は、主にQALにおいて「質問する、要求する」の意味を持つ行為動詞として用いられる。一方派生語幹では、ニファル語幹の他にもピエル語幹（「尋ねる、物乞いをする」）、ヒフィル語幹（「（求めに応じて）与える、貸す」）の各語幹において使用例があるが、QALと比べると出現数は非常に少ない⁶⁾。問題のニファル語幹は「許可を求める、賜暇を求める」の意味で翻訳される⁷⁾のが普通であるが、これは「自らのために求める」の意味がさらに特殊化したものとして解釈される。以下の3例がその使用実例である。（訳は従来の解釈による。）

1) niš' ōl niš' al mimmennî dāwīd lārûš bêt-lehem 'îrô

ダビデは、その都市ベツレヘムへ急いで行く許可を求めた。(1. Sam. 20:6)

2) niš' ōl niš' al dāwīd me 'immādî 'ad-bêt lāhem

ダビデはベツレヘムへ(行くため)私に許可を求めた。(1. Sam. 20:28)

3) ūlqēš yāmîm niš' altî min-hammelek

そして(その)日々の終わりに、私は王に賜暇を願い求めた。(Neh. 13:6)

1)においては、「許可を求める」内容が不定詞句 lārûš~によって表され、2)ではそれが簡略化された形で表されている。そして3)ではそれが全く省略されているため、一般には「賜暇を願う」意味で解釈されている。また「許可を求める」相手に関しては、3例とも min~系統の前置詞句(「~から」)が用いられている。また、1)及び2)では独立不定詞が定動詞に先行しているが、これは通常は強調的に「しきりに~する」のニュアンスを表すものとして解釈されている。

これらを仮に、上述のように「許可を求める」意味として解釈すると、次の例文における QAL の意味と大きな類似性があることは明確である。

4) hāšā' altî bēn mē' ēt 'ādōnî

私は我が主から息子を求めたでしょうか。(2K. 4:28)

ここでも1)~3)と同様要求の相手が min~系統の前置詞句によって表されている。また、1)では不定詞句が要求の内容となっていたが、QALにも次のような文例がある。

5) wāgam-liš' ōl bā' ōh lidrôš

そして、伺いを立てるよう霊媒に求めたことにもよって、(1C. 10:13)

ここでは lidrôš が要求の内容を表す不定詞句である。また、要求の相手が前置詞 bā' によって表示されているが、これは神託を求める際の対象に対して多く用いられる前置詞である。

以上のように、QAL もニファル語幹と同様 min~系統の前置詞句や不定詞句を支配することができる点でニファル語幹と共通性があり、意味的にも類似性を認めるのはあまり困難ではないように思える。むしろ意味的な差異はする場合かえて非常に微妙なものとなるため、多くの研究はニファル語幹の方の意味を上述のようにギリシャ語の中間態との類似という観点から説明づけようとしている。すなわち「自らのために」というニュアンスを「要求する」意味に付加し、それがここでニファル語幹を使用させる主な要因として働いていることを示そうとしている。(「受益的」という用語もここに由来する。)

しかし、この解釈にも次のような問題点がある。

第一に、ヘブライ語では受益的なニュアンスを表すために、次の例文のように前置詞句 (lā~) を用いることができる。

6) wəlō' -šā' altā lākā yāmîm rabbîm

そしてあなたは自分のために多くの日数を求めなかった。(1K. 3:11)

これはQALが前置詞句を伴った構文であるが、ここでの受益的意味がニファル語幹を使用した場合の意味とどのように異なるのかについて、従来あまり体系的な説明がなされていないように思われる。

また、さらに重要な点として、この機能と元の再帰の機能との関係や、さらには他の語幹との対立関係など、語幹機能の観点からこの動詞のニファル語幹の意味を説明づけようとする視点が従来の解釈には欠けていたように思われる。

これらの問題点があるため、一度これまでの文脈に依存した解釈を離れて、他の語幹との機能的対立という観点からこの動詞のニファル語幹の意味を再び捉えなおしてみる必要があるように思われる。従来は専らQALとの比較に終始してきたきらいがあるが、QAL以外にもヒフィル語幹など、出現数は少ないものの重要な語幹がこの動詞にはあり、それらとの比較も行わなければならない⁸⁾。特に、ヒフィル語幹は前述のように「与える、貸す」の意味を持っており、これはBDBに従えば‘let one ask (successfully)’から派生した意味のようである。ここでは元のQALの意味との関係が明白であり、しかも副詞‘successfully’が示唆しているように、いわゆる目標点への到達といった、アスペクト的側面が関与している可能性も示唆されている。そのため、一度ニファル語幹についても同様の視点からとらえなおすことができないか、改めて検討してみる必要があるように思われる。

以下においては、主にQALとヒフィル語幹を中心にしてニファル語幹との対応関係を探っていきたい。

2. √s'l の各語幹における用法

2. 1. QAL

QALにおける√s'lの意味は、「要求する」「質問する」の二つに大別することができる⁹⁾。ただし、ここでは特にニファルと関わりが深いと思われる「要求する」の意味で用いられている用例のみに対象を限定して議論を進めることとする¹⁰⁾。まず、(1)要求の向けられる相手、(2)要求により得ようとする物やことがら、の二点に的をしぼり、前者をN₁、後者をN₂と仮に表記しておいて、それらの取る形式をまとめてみると、大体以下のようなになる。

まず、N₁は表示されない場合が多く、「要求する」意味での全71例中40例において表示されない。表示される場合でも目的語の形式はまれであり、接辞代名詞の形で3例が認められるのみである。

7) kî šam ša' ēlūnū šôbēnū dibrê-šîr ...

なぜなら、そこで我々を捕虜としたものたちが我々に歌の言葉を求めたので、

(Ps. 137:3, 他にDt. 14:26, Jes. 58:2)

この3例はいずれもさらに直接目的語をN₂として支配しているものばかりであり、少な

くともこれらの接辞代名詞は間接目的語とみなすべきものである。

他のほとんどの場合N₁ は前置詞句を取る。ほとんどは min～系統の前置詞句である。
(例4 参照)

また、N₂ に関しては、多く直接目的語の形式を取る。しかも全71例中無表示のものは9例しかなく、N₁ の40例という数字と比べても相対的にN₂ の重要度はかなり高いと言える。また、少数ながら間接疑問節や同族目的語を支配することもできる。実例は省略する。

一方、次のような例文もある。

8) taḥat haššə'ēlāh 'āšer šā'al layhwāh

彼がヤハウエに求めた品物(願い)の代わりに (1S. 2:20)

この例は実際にはヒフィル語幹であったものがQALとして編集された可能性が指摘されており、次のようにテキストの修正が提案されている。(BHS参照。)

9) taḥat haššə'ēlāh 'āšer hiš'îlāh layhwāh

彼女がヤハウエに貸し与えた品物の代わりに

この修正が正しいとすれば、これは例9)と同じ構文と考えてよいと思われる。

以上の点を表にまとめると次のようになる。

	φ	DO	DO+Inf.	Inf.	Ind. Qu.	Cog. 0	計
φ	7	28	2		3		40
IO		3					3
PP { <u>min-</u> <u>b -</u> <u>l -</u>	2	18				5	25
				2			2
						(1) ¹¹⁾	1
計	9	49	2	2	3	6	71

ところで、「要求する」という動作の目標点を仮にその要求が受け入れられた時点であると仮定すると、QALにおいてはそこへの到達は含意されないことになる。これを仮に次のように図示することにする。(N₀はこの場合要求を行う主体。下線は主語。)

$$\underline{N_0} \xrightarrow{\quad\quad\quad} N_1$$

N_2

要求自体は N_1 に対して行われるので、矢印は便宜上 N_1 に向けておく。この場合、 N_0 は N_1 に対し N_2 を与えるように要求をしているものの、その要求が実際にかなえられるという明確な目標点への到達までは含意されていない。すなわち、 N_1 は「要求する」行為によって影響を受ける直接の被動者とはなりえていない。そのことは直接目的語に N_1 を取る構文がほとんどないことにも表れている。従来の解釈ではニファル語幹の意味も基本的に同じ図式で表すことができるが、この場合「自らのために」というニュアンスが加わる点異なる。このニュアンスは上のような図式では表しにくいものではあるが、仮に次のように表しておく。

$$\underline{N_0} \xleftarrow{\quad\quad\quad} N_1$$

N_2

この場合実際には行為者である N_0 が主語に立てられることになるが、一般的なニファル語幹は原則として被動者を主語に立てる構文を取るため、少なくともその点で通常のニファル語幹の用法からは逸脱してしまうことになる。

2. 2. ヒフィル語幹

ヒフィル語幹の出現数は少なく、確かなものは2例しかない。

10) wayyaš' ilûm

彼ら（エジプト人）は彼ら（イスラエル人）に与えた。 (Ex. 12:36)

11) wəgam 'ānōkî hiš' iltihû lāyhwāh

そしてわたしもヤハウエに彼を貸した。 (Is. 1:28)

例10の場合間接目的語は接辞代名詞の形で表れているが直接目的語は表れておらず、これは直前の文脈から容易に復元可能であるためであると思われる。

一方例11では間接目的語は前置詞句 lāyhwāh で表され、直接目的語は接辞代名詞 -hû の形を取っている。このように接辞代名詞はこの動詞の場合直接目的語であれ間接目的語であれ表すことができるため、結果的には異なるタイプの構文が出現することになるが、意味的にはどちらも「貸し与える、求めに応じて与える」の意味で用いられているといつてよい。なお、前出の例9 を仮にヒフィルとして解釈すると、ここでの例11と同じ構文を取っていることになる。

ところで、ヒフィル語幹というのは基本的には使役語幹であるが、この動詞の場合にはその意味は単なる行為の使役「求めさせる」ではなく、「与える」である。すなわち、この語幹の持つ意味の中核はすでに「要求する」という行為そのものからははずれ、その要求に応じて行われる行為の方へと移っていると見ることができる。そのため、ヒフィルの場合の行為の方向を仮に次のようにしておきたい。

$$\begin{array}{ccc} N_0' & \longleftarrow & N_1' \\ N_2' & & \end{array}$$

この場合、要求を受けた人物 (N_1') はその結果として行われる行為の新しい主体となって、今度はもとの N_0' に対して要求された N_2' を与える、あるいは要求された行為を行う側に立っている。

ところで、この場合もとの N_0' は直接目的語として表されている (例10) ことから分かるように、ヒフィル語幹によってあらわされる行為の直接の被動者となる資格を得ているように思われる。そのため、この図式をここで仮にニファル語幹に適用し、 N_0' をその主語として解釈しようとする、どうなるだろうか。

$$\begin{array}{ccc} N_0' & \longleftarrow & N_1' \\ N_2' & & \end{array}$$

例1)の場合でいえば、($N_0' \rightarrow dāwīd$, $N_1' \rightarrow mimmennī$, $N_2' \rightarrow lārūṣ \sim$) ということになる。つまり、要求に応じて (許可を) 与えられる対象としての N_0' 「ダビデ」が主語となり、与える側としての N_1' 「私」が前置詞句「私から」によって表示されているとみなすことになる。無理して訳せば、「ダビデは私からベツレヘムへ行く許可を得た。」とでもいうふうになるかもしれない。無論、ここで要求の内容を表す不定詞句をヒフィル語幹における直接目的語と同様に N_2' に属するものとしてみなしうるかどうかは問題のあるところではあるし、後続の文脈との接続が悪くなる等の問題もあるが、それでもこの見解に従えば、受益的機能によらずに説明が可能である、という利点もある。

3. $\sqrt{s'l}$ におけるニファル語幹の位置づけ

Bicknell(1984)は、ニファル語幹を含めたヘブライ語の受動形式の機能を次のように総括している。

'I propose that their function be viewed in terms of the aspect of action which they signify. This aspect does not include the cause or source of the action, if one is implied. It includes only the end result of the action or signifies the resulting state of the patient.' (P128)

この見解に従えば、ニファル語幹を含めたヘブライ語の受動形式は動作や過程そのものよりもその結果としての被動者の様態に重きを置いた表現である。しかし $\sqrt{s'l}$ の QAL の場合、少なくとも「要求する」の意味に限っては N_1 は上述のように動作における直接の被動者とはなり得ていないため、これをそのままニファル語幹の主語とすることは難しいと思われる。よってニファル語幹を QAL の受動形式として位置づけることには若干の無理が伴うことになる。従来の研究では、この問題を解決するためにギリシャ語の中間態との類似という観点からの説明を行っていたことも前述の通りである。

一方、行為の結果として生じる被動者の様態を、ヒフィル語幹による行為の結果として

N₀' (N₁'ではなく) に生じた状態、つまり「(求めに応じて) 与えられ、許可された」状態として解釈する可能性についても本論文では仮に指摘してみることができた。この場合、要求するという動作そのものはすでに内容の中心から外れ、その要求によりなし遂げられた事柄、すなわち要求された物やことがらがN₀'に与えられた、あるいは許可されたということに重点が移っていると考えることができる¹²⁾。この場合N₀'はN₂'とともにヒフィル語幹の被動者としての資格を得ている。

この解釈に従えば、新たな機能範疇を設けることなく、より統一的に語幹間の関係をとらえることができるように思われる。全く同じ動作過程において、N₁'の側から見た場合(ヒフィル)とN₀'の側から見た場合(ニファル)において明確な対称性が得られることになる。なお、上の図式でN₂を主語に立てた表現としては、次のQALの受動分詞の構文を指摘することができる。

12) wəhû' šā' ūl

それは貸し与えられた物である。

(2K. 6:5, 他に1S. 1:28)

QALの受動分詞もBicknellの述べる受動表現の一部であり、同じく結果的なニュアンスをもって用いられている。

4. 終わりに

今回は、解釈論的な要素を極力排除するため、あえて文脈から切り離れた上で辞書の意味記述や語幹機能に関する研究を頼りにニファル語幹の用法についての再検討を試みた。そのため、説明の手順が若干くどすぎるほどのものになってしまったが、とにかく本考察の結果、上の1)～3)に関しては特に受益の機能を認めなくとも説明が可能ではないか、との結論に達することができた。もっとも動詞の出現数自体が少ないため、他の動詞に関しても同様の調査を行って検証してみる必要がある。また、ここでの結論に従えば、QALが他動詞であるにもかかわらずそれ以外の語幹と対応していることとなり、この点に関してもさらに検討が必要である。もっとも、動詞の統語特性における自他の対立はセム語の動詞組織に本質的なものではないと言われており、そのような対応関係を決定づける要因として、態のほかにも例えば動詞のアスペクト特性のような別の要因が係わっている可能性がある¹³⁾。そのような新しい観点からの詳細な観察が今後さらに必要とされるのではないと思われる。

今回は意識的に文脈的考察を排除したが、今度はこれらの文を前後の文脈の中に戻して置いて、上で得られた結論に解釈上困難な点がないかどうか検証しなければならない。実際には、上の1)及び2)の文の直後の文脈との関係に関しては検討すべき問題があり、このままでは本論文で得られた結論は明らかな矛盾に直面することとなるからである。これはぜひとも解決せねばならない課題であるが、これについてはまた稿を改めて述べるつもりである。

注

1. 「受益」はWaltke & O' Connor (1990)の術語 'benefactive' の訳語である。これは従来多くの文献で 'middle' 「中動」という術語で記述されてきた機能に相当する。しかし後者は文献によって異なった意味で用いられる場合がある上、印欧語の中間態ともまぎらわしいため、本論文に限っては前者の術語を採用した。

2. 語幹間の対立に関しては、次の図式(若干簡略化してある)が提案されている。

	I	II	III
I Active	Qal	Piel	Hiphil
II Middle/Passive	Niphal	Pual	Hophal
III Reflexive	Niphal	Hithpael	Hiphil (internal)

(Waltke & O' Connor, pp. 358)

3. Waltke & O' Connor(1990) は以下のようにニファル語幹の機能を細分化している。

1. Basic Species of the Niphal (middle, passive)
2. Adjectival Species of the Niphal (simple adjectival, ingressive-stative, gerundive)
3. Double-Status Species of the Niphal (reflexive, benefactive, reciprocal, tolerative, causative-reflexive)

ここで問題となるのは3. の 'Double-Status Species of the Niphal' であるが、ここでいうDouble-Status とは、主語の名詞句が動作主であると同時に被動者でもあるという二重性を持っていることを指している。Bicknell(1984)の用語に従えば、この場合動作主と被動者は同一指示(coreferential)である。ただし、その同一指示性を表示するための、厳密な意味での再帰代名詞というものは実際には存在しないことから、多くのニファル動詞は再帰的にも受動的にも形式的な差異を伴わずに用いられている。

a) wənōsaḅ gam-hû 'al-šōnə' ênû

そして彼(イスラエル人達)も我々の敵に加わるだろう。(Ex. 1:10)

b) wənōsəḅāh nāḥlālātān 'al nāḥlālāt hammatṭeh

そして彼女たちの相続分はその部族の相続分に加えられるだろう。(Nu. 36:4)

共に√ysp のニファルの文例であるが、通常は上が再帰、下が受動として解釈されている。しかし、このような場合に両者を区別する形態的、統語的特徴を指摘することは困難であり、Bicknell自身も最終的に再帰的解釈を決定づけるのは主語のanimacy の他、現実世界についての知識、文脈(context) などの非統語的基準であると結論づけていることから判断すると(pp. 100)、たとえ主語に二重性を認めるとしても、基本的には主語は被動者であり、動作主性は文脈等の要因によって付随的に主語の特性に加えられるものとしておく方が実態に則しているように思われる。

4. Gesenius-Kautzsch(1910) は *endysasthai khitōna* 'to put on (oneself) a tunic'

- を例としてあげている。またWaltke & O' Connor はフランス語の代名動詞 'Je me lave' と 'Je me lave une chemise' の違いを、ここでの再帰と受益の関係に比較している。
5. Gesenius-Kautzsch(1910), Jouon(1910)等は niš'al のみを代表例としてあげている。一方Williams(1976)は他に nikbad 'achieve glory for oneself' をあげているが、これは他の文献では受動ないしは再帰として解釈されている(Bicknell, pp.105 参照)。Waltke & O' Connor はこの機能が一般的でないことを述べているが、他にどのような動詞がここに属するのか、不明である。§23.4d 参照。
6. Jenni & Westermann(1976)によれば、QAL 1 6 2 に対し、ニファル5、ピエル2、ヒフィル2、計171である。
7. ギリシャ語70人訳では *paraiteomai*(beg from another, ask as a favour of him, obtain by entreaty, obtain leave from) や、*aiteo*(ask, beg, beg one's departure, ask leave to depart)などにより翻訳されている。
8. 注1の図式では、ニファル語幹は横の軸においてプアル及びホファルに対応する語幹として位置づけられていたが、これらの語幹はセム語においては比較的後の発展によるものとされている(Blake(1901) 参照)。それに対し、ヒフィル語幹はニファル語幹と共に接頭辞付加により形成される語幹であり、その接頭辞も両者とも代名詞起源であると想定されているなど、形式面では明らかに密接に関連しているが、上の図式ではその点が不明確である。接辞の起源の問題に関してはLieberman(1986) 参照。
9. Jenni & Westermann(1976), pp.842参照。
10. 「質問する」の意味における√š' l のQALは、統語的に若干異なった振る舞いを取る。それが典型的に表れるのは目的語であり、後述のように「要求する」の場合とくらべ、質問の場合はその相手が直接目的語の形式を取る実例が非常に多くなる。これも非常に興味深い現象ではあるが、ここではこれ以上立ち入らない。
11. 例文9)の実例がここに属する。集計には一応含めておいた。
12. ちなみに、√š' l のヒフィル語幹は、アラビア語においては√š' l の第4形に相当する。これは同族目的語 šū'l を伴って 'to fulfill someone's wish, comply with someone's request' の意味で用いられる。
13. Comrie(1976)はアスペクトとヴォイスとの相関関係について述べており、そこでは完了(Perfect)の受動が、対象における状態の変化を表すことが述べられている。詳しくは§4.6. 参照。それ以外ではBicknell(1984), Waltke & O' Connor(1990)等を参照。

参考文献

- Bicknell, B. J. (1984). Passives in Biblical Hebrew. Ph.D. Michigan.
- Blake, F. R. (1901). "The Internal Passive in Semitic" Journal of the American Oriental Society. Vol. 22. pp. 45 -54.

- Brown, F. & S.R.Driver & C.A.Briggs (1907). A Hebrew and Hebrew Lexicon of the Old Testament. Oxford. Oxford Univ. Press.
- Comrie, B. (1976). Aspect. Cambridge. Cambridge Univ. Press.
- Eaton, J.H. (1974). "Some Misunderstood Hebrew Words for God's Self-Revelation." Technical Papers for the Bible Translator. Vol. 25. pp.331 -338.
- Gesenius, W. (1910). Gesenius' Hebrew Grammar. edited and enlarged by E. Kautzsch. translated by A. E. Cowley. Oxford. Oxford Univ. Press.
- Goshen-Gottstein, M.H. (1985). "Problems of Semitic Verbal Stems: A Review." Bibliotheca Orientalis. Vol. 42. pp.278 -283.
- Jenni, E. & C. Westermann. (1976). Theologisches Handwörterbuch zum Alten Testament. Vol. 2. Munich. Chr.Kaisar.
- Jouon, P. (1923). Grammaire de l'hébreu biblique. Rome. Institut Biblique Pontifical.
- Lieberman, S.J. (1986). "The Afro-Asiatic Background of the Semitic N-Stem: Towards the Origins of the Stem-Affirmatives of the Semitic and Afro-Asiatic Verb." Bibliotheca Orientalis. Vol. 43. 5/6. pp.577 -628.
- Müller, H.P. (1985). "Ergativelemente im akkadischen und althebräischen Verbalsystem" Biblica. Vol. 66. pp.385 -417.
- Waltke, B.K. & M. O'Connor. (1990). An Introduction to Biblical Hebrew Syntax. Winona Lake. Eisenbrauns.
- Williams, R.J. (1976). Hebrew Syntax: An Outline. Toronto. Univ. of Toronto Press.

略語

BHS: Biblia Hebraica Stuttgartensia. 2nd ed. K. Elliger & W. Rudolf ed.

Stuttgart. Deutsche Bibelgesellschaft. 1983.

BDB: A Hebrew and Hebrew Lexicon of the Old Testament. F.Brown, & S.R.Driver & C.A.Briggs. Oxford. Oxford Univ. Press.

Cog.O. : Cognate Object

DO: Direct Object

IO: Indirect Object

Ind.Qu. : Indirect Question

Inf. : Infinitive

PP: Prepositional Phrase